

「国際学会の宴会・遠足 ― 趣向あれこれ」

大阪大学大学院法学研究科教授 林 智良

このカタログを目にされる皆さまには、国内外の学会やシンポジウムへの参加経験をそれぞれにお持ちでしょう。私は、ローマ法史を専攻して60歳代まで年を重ねて参りました。そこで、内外学会への参加体験で印象に残ったものを綴り、皆さまのご経験との比較に供したいと思います。

専攻分野で国際交流と発表を行う場として自分が特に大切にしている学会に、ベルギーを拠点とするSociété internationale d'histoire des droits de l'Antiquité(国際古代法史学会、以下SIHDAと略記)があります。毎年1回世界のどこかの大学関係者が手を挙げて世話をして、さまざまな国で大会が開かれます。歓迎のカクテルパーティーから始まって、最終日の宴会、さらにその翌日の遠足までの全日程で大体5、6日かける慣行です。毎年の組織者は、その国・地方ならではの特色を生かすべく趣向に知恵を絞ります。

まずは、生涯で最も地下深くで経験した宴会です。クラクフ(ポーランド)で開かれた第72回SIHDA大会(2018)では、ヴィエリチカ岩塩坑の奥深くにあるレストランで宴会がありました。そこにたどり着くまでに上り下りのある坑道を1時間程歩いたので、疲れた身に歓迎の甘いリキュールがとりわけ深く沁みました。公式サイトによりますと地下125メートルですので、それまでは勿論、これからの人生でもこれ以上深く潜っての飲食はしないように思います。翌日の遠足では、教会や古城跡などの選択肢もあったはずなのですが、現代を生きる者として歴史の経験を学ぶべくアウシュヴィッツ=ビルケナウ強制収容所跡を選びました。本エッセイ執筆者に私をご推薦くださいました宮坂真依子先生ともそちらにご一緒しました。

次は、一番緯度の高い遠足先です。エジンバラ(英国)で開かれた第63回大会(2019)では、バスを南に走らせて、まずハドリアヌスの長城、次いでローマ軍北辺の砦たるウィンドランダを見学しました。この遠足では、なかなか足を運べないローマ帝国の北辺を現地踏査できるということで、参加者が高揚している印象を抱きました。一般に古代法の舞台となった古典古代時代の遺跡は古代法研究者に好まれます。自分が参加した遠足では、第69回大会(2015)のイスタンブール(トルコ)で参加したビザンツ帝国時代の地下水道施設や教会のイコン見学が特に印象的でした。記憶では、第64回大会(2010)のバルセロナ(スペイン)を始め、様々な大会でちょっとした遺跡の見学を企画していただきました。他方で、ギリシア・ポリスやローマ帝国の支配地域域外での開催ですと、見学先をどう選ぶかが組織者を悩ませます。第76回(2023)を企画したヘルシンキ(フィンランド)の同僚も、思案されていました。結果としまして、隣国エストニアの首都タリン見学など大変魅力的な企画を提供していただきました。緯度を考えますとタリンの方が高いのですが、残念ながら体調不良でこちらは参加できずでした。他方で、アフリカ大陸の南アフリカや南米大陸のチリなど多様な諸国から参加者が集まる様子を見ていますと、これからは地理的なギリシア・ローマ世界(更に西洋古代法)の直接的後継者という範囲を越えて様々な場所で大会が開かれ、そこからの遠足も企画されてゆくものと予測します。

最後に、クルーズに触れましょう。上の第69回大会では、海峡の大都会イスタンブールを海から眺めるクルーズを企画していただきました。船上ではベリーダンスの実演もあったりして賑やかでした。SIHDAを離れますが、上海(中国)の華東政法大学所属の同僚が企画されたローマ法シンポジウム(2014)でも、博物館見学と並んでクルーズの歓迎をいただきました。国内の法制史学会総会でも、第49回研究大会(2001)にて広島大学の実行委員会がクルーズを企画していただきました。やはり、船に乗るといふ企画には非日常感を演出できる利点があるのでしょうか。

実は、前述の宮坂先生を含め日本国内の法制史・古代史・文献学の研究者多数が力と知恵を合わせて第77回SIHDA大会(2024)を日本に招致しております。その記録として、よろしければ「ローマ法雑誌」第6巻(2025)(京都大学学術情報レポジトリKURENAIに収録)掲載の各種記事をご覧ください。